

小説『墮ちる』Part2 シークレット・バージョン

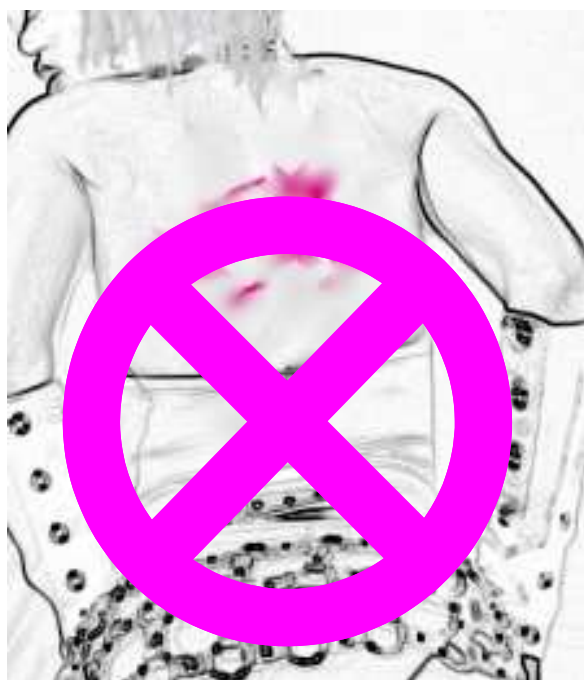
あんぷらぐど著

荒縄工房・発行

<http://unpluggednovel.blog109.fc2.com/>



シークレット・バージョン



自虐版 罪と罰

みたいな

Part2

あるいは、自ら堕ちていく生き物の日記に、**まだ続きがあったりして……**

サンプルです

ご注意ください

この作品は、すでに刊行されている小説「『墮ちる』～自虐版罪と罰みたいな～」では、削除された後半部分を、**当初の状態にできるだけ近い状態**でお届けします。これまで公にされていなかったシークレット・バージョンです。2009～2007年に「ふにやふにや」名義で短期間公開した状態を復元した原稿を使っています。

そのため、読みにくいところ、誤記

もそのままのところがあります。事実関係や時制に矛盾がある部分もあります。

状況の設定、およびどうしてこうなったか、という点については、既刊を踏襲していますので、ご参照ください。

また見出しと日付は、これもかつての執筆・公開時のものであって作中の日付とはシンクロしていません。

本作は妄想によるものであり、この作品はフィクションであり、実在する、人物・地名・団体とは一切関係ありま

せん。また特定の思想を推奨、批判、
中傷する意図もありません。

※正編の小説『墮ちる』は、こちらか
らお求めいただけます。

[http://www.dlsite.com/maniiax/circle/prof
ile/=maker_id/RG16218.html](http://www.dlsite.com/maniiax/circle/profile/=maker_id/RG16218.html)

目次

獣道編 12

獣道へ 13

廃村の夜 26

豚嫁の交尾狂い 37

種付け便所 44

膨らむ自虐の気持ち 63

二頭の犬 75

もっとみじめな姿にして 89

拷問オークション 99

絶叫と歓喜の間に 114

ちょっとしたお休み 130

思いがけない出来事	140
牛の乳房をめざして	156
三人の若者たち	170
爆弾低気圧の夜	183
年越しの祭り	198
かがり火が消えるまで	209
痛めつけてもらおう快感	223
遠い夜明け	235
初日の中で	249
ミチさんの錯乱	262
すべてが無に戻る	272
自虐そして自由へ	281

放浪編 294

不法投棄の公衆便所 295

私をいじめてください 308

肉のおもちや 316

朝のおつとめ 326

お尻いじめ 333

肘まで入れてください 351

噴水ショー 362

ゴムホース責め 371

みなさんの実験台 384

ビッグマザーの怒り 394

地獄アパート 409

- じじいたちの楽しみ 419
- 肉布団 436
- マダムたちの鑑賞会 446
- 血止め体操 463
- 少女の頃の思い出 472
- いじわるな人たち 479
- コインランドリー 487
- お尻を髭られて 497
- ウミガメの涙 507
- 嘆願の中で 516
- 三本の串 525
- 地獄アパートの所有者 532

無意味な行動 540

はじめに

小説『墮ちる』では、主人公の日記は途中で終わり、オガタの日記となってエンディングを迎えています。

その中に、これからお届けする「未完結編」でも扱っているテーマが使われていますが、描写および状況と結末はかなり違います。

話は、主人公が会社で醜態をさらして逃げるところからはじまります。当初、このあと主人公は、ミチの姿を見

つけて、逃げ出します。そして、やってきたタクシーに飛び乗ってしまいます。

話は、そこからはじまります。

獣道編

2006年12月16日～2007年01月07日

2006年12月16日

獣道へ

お金もなにもない私は、タクシーの運転手さんに町外れにある林まで連れていってもらいました。身体で満足していただくしか方法はありません。

「お願いです。お金がないので、私なんでもしますから」

「ふざけるな、バカ野郎」

あいにく、運転手さんは気の荒い中年のおじさんで、林の中にある空き地

にタクシーを止めると、私を引きずり降ろします。そしてコートを取り上げると、裸の私をなんども蹴りました。

「おまえみたいな変態に、なにができるってんだ」

そしてお尻に刺さっているおもちゃをずるっと引き抜きます。おまんこを開いているリングが引っ張られて、薄い肉が伸びきります。

「ちぎれちゃう」

「ちぎれたらいいのさ。人をバカにしやがって」

そして私に溜まりに溜まったおしっこをかけてくださいました。そして顔に痰を吐いて「死んでしまえ」とおっしゃいます。

タクシーはUターンして町へ戻っていきます。犯してもくださりませんでした。私はまったく価値のない公衆便所なのです。

雨が降ってきます。私は砂利の痛みを背中に感じながら、空を見上げます。雨が私に向かって落ちてきます。灰色

の雲が手の届きそうなほど近くにあります。周囲の木々は、何事もないように静かです。

死ねばいいんだな、と思います。こうして身体中に落書きされ、人の汚物をいただき、あらゆる方から蔑まれ、乱暴されて、ボロボロになっていく死に方もありますが、いまここで終わらせることもできます。針金で首をくくればいい。勢いよくやれば、スパッと首が切れるかもしれません。でも、その前に、もう一度、あの快感を味わい

たいのです。

泥にまみれたおもちゃをお尻に入れ直します。そして突き刺さる砂利の上を裸で転がりながら、私は快楽を求めて自分の穴をいじめ抜きます。痛み、痛み、痛み、そしてあの波が……。

クルマがやってきました。

私は夢中でオナニーをしています。私の顔を轢くかのように、四輪駆動の大きなクルマは、ゆっくりと進んでき

ます。このまま頭を虫けらのように踏みつぶしてください、と私は叫んでいました。叫びながら、大きな大きな快感に飲まれていました。感じています。私はいきっぱなしになっています。このまま死ねたらいい、と本当に思いました。

ドアが開いて人が降りてきました。

「感じてるのか」

見上げると、それはどこかで見覚えのある人でした。ケンちゃんが連れて

きたニセ獣医、オガタ先生です。その足が私の顔にのりました。ブーツの底を「舐めろ」と言われて、私は舐めまです。そうしながら、彼はジッパーを下げ、あまり固くなっていないおちんちんを出して、私の開ききっているおまんこにおしっこをかけてくださいました。

「死のうとか、思ってるんだろ」

「はい」

靴で顔がぐちゃぐちゃにこねられます。

「どうせ死ぬんだから、なにをされてもいいだろう」

それは少し違う、と思いますが、反論なんてできません。オガタ先生がいるなら、いずれケンちゃん、そしてミチさんにも知られてしまうかもしれません。あそこに連れ戻されるのは、イヤでした。

「こんなにされても生きているなんてな。お前はとことん、人の道を踏み外したどうしようもない公衆便所っ

てことだな」

「殺してください」

「ああ。殺す。ゆっくりじわじわ、殺してやるよ」

そして私のコートを手にすると、それを大きなハンティングナイフで切り裂きました。

「もう一生、こんな服はいらない。ブーツも脱げ」

私は顔を踏みつぶされながら、ブーツを脱ぎます。それもまた、ナイフで

切り刻まれて一緒に捨てられてしまいました。

「どうか、ミチさんたちには知らせないでください」

「ああ。そんなつもりはない。偶然、お前が会社から全裸で出てきたところに居合わせたのさ。驚いたが、ミチのやつの前でタクシーに乗って逃げたのはよかったぜ。しびれたな。おれはだから尾行した。どうなるのか見届けようと思ってさ」

「ミチさんたちに渡さないでください」

い」

「そうだな。それはお前しだいだ。お前はどうせ、自虐趣味がこうじてこうなったんだろう。いろんな連中がお前を利用して遊んだり、稼いだりしているけど、そんなことはどうでもいい。お前はこうやって一人でも、自分をいじめてオナニーしている。そういうやつだ」

「はい。そうです。私はいつも自分で命令して、痛いことや恥ずかしいことをしてきました。ずっとそうしてきた

んです」

「だったら、これからもそうすればいい。お前がどれだけ自分に対して自虐的にできるか。それ次第でおれはお前の処分を考えてやるよ。殺してやってもいいし、あの連中に引き渡してもいい」

「私はもっともっと罰を受けるべきなのですね」

「罰ね。なんでもいいさ。自分で自分をゆっくり殺せばいい。おれは見届けでやる」

「お願いします」

こうして、私はオガタ先生の車のトランクに詰め込まれ、山道をしばらく移動することになったのでした。

2006年12月17日

廃村の夜

クルマから降ろされると、そこはさらに山深い谷間にある小さな集落でした。いえ、集落と見えたのはすべて廃屋で、ここはもう見捨てられた村なのです。それでも、ニワトリの鳴き声、犬の吠え声などが聞こえてきます。

「おれの別荘だよ。この一帯はおれのものなんだ」

「どうして誰もいないんですか？」

「みんなおれが嫌いだからさ」

「え？」

「冗談。十年ほど前に崖崩れがあって、この上の方でたくさん人が死んでね。そのあと、住みにくくなったのか、だんだんみんな出て行って。いまじゃおれだけになったんだ」

寂しい、この集落を見ただけで、私の自虐の心がうずきました。私は四つんばいになって「どうか、私を飼い殺してください」とお願いしていました。じわっと熱い汗がしたたたっていきま

す。

「なるほどね。いいよ。おまえは公衆便所で、人間以下、家畜以下の存在ってことだものな」

「はい」

「じゃあ、おまえはきつと、気に入るさ」

オガタ先生のあとをついていくと、強い異臭を感じます。なにかがそこにいます。

「この村の生き残りだよ」

巨大な真っ黒な牡豚。野性的のように激しく私に向かってきます。でも柵があるので近づけません。その柵の中は豚の糞と藁、そして柔らかかな土です。

「ここに住むのはどうだ」

「豚のお嫁さんになるのですね」

「ははは。そうなるな。豚とセックスできるのか」

「気に入っていただくように努力します」

「食われるかもしれないぞ」

生きたまま豚の餌になる……。そう

いう映画を以前、人間だった頃に見た
ような気がします、それが私なのだ
とは当時はそこまで思っはいなか
ったでしょう。

私は獣道に入り込み、畜生以下の存
在に成り下がるのです。

「ハサミを貸していただけませんか」

「なにをすんだ」

「この髪を」

人間らしさの残る髪の毛はもうい
らないのです。オガタ先生は小屋から

かなり古い大きなハサミを持ってきました。軋み、錆びが浮いています。

「これしかないけど」

「ありがとうございます」

ざくっと音を立てて、髪を切りました。鏡もないので、適当です。切れ味が悪いので、何本もむしり取るように引き抜かれます。その痛みもあって涙がぽろぽろとこぼれます。手で触ってみて、もう人前に出られないほど、めちゃくちゃな髪になっていることを

確認します。

そして、私は自ら、豚小屋の中に入
っていきました。豚が興奮して走って
います。蹴られたらたぶん、即死でし
ょう。しばらく小屋の隅で私はうずく
まっていました。やがて、オガタ先生
は豚の餌箱に大量の残飯をバケツで
入れました。

「おい、おまえは家畜以下なんだから、
これからはこの仕事もおまえが自分

でやれよ」

「わかりました」

「残飯はあそこのバケツに毎日運んできてやるから。水は裏の井戸からくむんだ」

そしてオガタ先生はクルマに乗り込みます。

「行ってしまおうのですか」

「ニセ医者でもそれなりに忙しいんでね。また来る」

廃村の廃屋に、私と豚だけが取り残

されます。私は豚の嫁となり、なんとかこの気性の荒い大きな豚と交尾しとげたいと願うのでした。いつか、豚に犯されているところを、オガタ先生に見ていただきましょう。そのためには仲良くならなければ。

寒くて冷たい小屋の中です。裸の私に少しずつ興味を持ったのか、食事を終えた豚は、私をにらみつけ、やがてちょっと近づいてきました。しかしそれ以上は来ません。私から行くと逃げ

ます。そんなことを何度かしていたら、突然、豚がものすごい勢いで私に突進してきて、私は柵にはねとばされました。息ができません。豚のじだんだ踏む足がすぐ近くにいます。

そして、私は見てしまいました。長い長いそのペニスを。包皮からぴゅーっと蛇の舌のように伸びては縮まります。おまけに先端はねじれています。なんというのでしょうか、ワインのコルク抜きのような感じですか。あの勢いで

犯されたらどうなることか。

そう思うだけで、恐ろしく、そして豚嫁として期待がふくらむのです。

時間をかけて落ち着かせて、身体を撫でてさしあげます。舌で汚れた身体を舐めてさしあげます。落ち着いた豚は、寝床の藁の上にどんと横になって寝始めました。私はその隣に横になります。長い長い時間が、私たちにはあります。

2006年12月18日

豚嫁の交尾狂い

ある早朝のことでした。豚である私の彼のペニスを口でやさしくしてあげると、急にぴゅーっと伸びてきます。そして彼は私としたいと思うようになったに違いありません。

私は泥の上に仰向けになり、豚を迎えます。簡単ではないことはわかります。その姿勢ではとても私の膣には入

りません。四つんばいになってみます。
彼はすぐに飛びかかってきました。

「うっ」とその重みを感じます。百キロはあるのではないのでしょうか。

それでも片手でペニスを私の中へ誘導していきます。なんとか今日は交尾をしたいからです。

ムチのようにしなやかで素早い動きをするペニスを捕まえ、私の中に入れていきます。最初は細くて頼りない

お読みいただきありがとうございます
ました。

これからも、荒縄工房をよろしくお
願いたします。

<http://unpluggednovel.blog109.fc2.com/>

ど
こ
か
で
い
つ
か
東
京
の

第
一
部



小説『亜由美』

第一部

好評発売中です。

スカ、グロはありません。